

日本森林学会・日本木材学会 合同シンポジウム

「これからの木材利用と森林施業 ―木質資源のカスケード利用を目指して―」

日 時： 平成 25 年 3 月 27 日（水） 15：30～17：30

主 催： 日本森林学会・日本木材学会

会 場： 岩手大学 学生センター棟（大会会場に近接） 1階 G1 教室（収容 200 名）

開催の趣旨：

日本森林学会と日本木材学会の相互理解と連携を深めるために、分野横断的なテーマでのパネルディスカッションを合同シンポジウムとして行います。シンポジウムは、川上から川下までの各分野における現行の取り組みや課題について、4 名のパネラーからある程度網羅的に紹介していただき、参加者が他分野の理解を深めるための場として提供されます。それによって、木材のカスケード利用を意識した“これからの木材利用と森林施業に関するビジョン”について、共有認識を醸成する一助となれば、両学会の合同シンポジウムとして意義深いと考えます。なお、木質資源の生産・利用を語る際、従来は川上から川下への流れが通常ですが、木質資源利用の出口を見据えた視点から、話題の進行は川下から川上に遡上するスタイルで行われます。

<プログラム・要旨>

司会 山本信次（岩手大学）

開会挨拶： 第 63 回木材学会大会 実行委員長 関野 登（岩手大学）

15：35-16：00 テーマ① 木質バイオマスのエネルギー利用の観点から（秋田県立大木高研：山内 繁）

はじめに、最近の国際的なエネルギー動向と日本のエネルギー政策を概説する。化石資源枯渇や人為的気候変動等の諸問題への対応を基本とした政策の流れと、3.11 以後の変化を示し、木質バイオマス資源がどのように捉えられているのかを述べる。そのなかで、2012 年 7 月から開始された日本の FIT 制度に着目し、その木質バイオマスエネルギーに関する内容について検討する。次に木質バイオマスのエネルギー化形態の全体像を示し、利用法の中で、国内で実用化が進んでいるものについて、特長や運営上あるいは技術的課題などについて言及する。各種ボイラー、チップ焚き発電、ガス化発電、液体燃料製造などについて実例を挙げながら解説し、木質バイオマスが再生可能エネルギーの中でどのような特徴を持つのかを総括する。最後に、木質バイオマスエネルギーの将来的展望、すなわち木質バイオマスエネルギー化事業がどのような形態あるいは規模で発展していくべきかを、地域経済、特に木材産業や林業と関連づけて考察し、まとめとする。

16：00-16：25 テーマ② 木材加工・木造建築の観点から（森林総研：渋沢龍也）

「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」の成立などを指して、現在、木材産業・木造建築に対して追い風が吹いている、と評価することが多い。しかし、公共建築物はこれまで RC 造や鉄骨造であり、材料強度に基づく明快な設計手法が確立している。すなわち、これまで他材料・他工法のみを手がけてきた建築関係者が問題なく自由に扱えるように、木材関係者がこれまで以上の努力を払うことで、

設計の手法や材料の性能に関する知識・技術を確立しなければ、やはり木材は使えない、使うに足るだけの材料ではない、という全く逆の結末に達する可能性が高い。先人が築いた今日の木材産業のあり様を、貶めないためにはどうすればよいのかという致命的な問題に対して明確な解決策を提示することは難しいが、大きな命題を構成する個別の要素について検討することであれば可能であろう。本発表は、このような考えを端緒とし、国産材を工業資源として利用するにあたって解決すべき個別の技術的問題について整理する。

16：25-16：50 テーマ③ これからの素材生産・流通の観点から （森林総研：久保山裕史）

戦後しばらくは、国産丸太供給の資源的制約に対して、旺盛な復興需要があったため、材価は高止まりしていた。住宅の多くで構造材は現しとされたこともあり、製材品は見た目が重視されていた。結果として、林業経営においては無節の尺上丸太を生産することが目標とされてきた。しかし、50年以上の時を経た現在、国産丸太の供給力は高まったのに対し、木材需要の減少や円高が進行したことによって材価は低下している。また、住宅の工法の変化によって、見えがくれ材が主流になり、強度や寸法精度が高く、安価な並材製材品が求められるようになった。つまり、住宅構造材のマス市場は高価な見えがかり材から安価な並材へと変化してきた。そうした変化に合わせて、木材のマーケティング戦略を練っていく必要がある。そこで、本発表では、木材の市場をマスとニッチに区分し、マス市場戦略としては国産材加工コストや原料丸太の低コスト安定供給の方向性について提案する。ニッチ市場戦略としては、特化して対応する必要があることや、ニッチ市場をマス市場に変える取り組みの重要性について述べる。

16：50-17：15 テーマ④ これからの森づくりの観点から （岩手大学：國崎貴嗣）

生産年齢人口が減少し、第三次産業への従事者割合が高まる日本では、近い将来での林業従事者の大幅な増加は期待できない。こうした中で森林の公益的機能を持続的に発揮させつつ、黒字を出せる森林経営を展開するには、温故知新（持続可能な森林経営は「森林」、「林業技術」、「人材」があつてこそ）が重要である。森林、林業技術、人材をバランスさせる上で、今こそ森林計画（森林組織化、森林誘導、森林施業の有機的結合）を有効に活用することが求められる。森林組織化では、地域の実状を踏まえつつ、適切な作業級（目標林型と林分配置を明確にした、組織化された森林）を各地に設計する必要がある。このためには、現場を知る林業関係者（所有者、林業事業者、森林組合）はもちろんのこと、地域の森林・林業・木材産業の動向を知る行政関係者、地域の森林造成技術を科学的に評価できる研究者が、連携し続けることが必要不可欠となる。産官学の連携を生み出し、これを継続させる上で、産官学いずれも、膨大な累積債務を抱える政府からの予算（補助金）にあまり頼ってられないことを強く認識すべきである。

17：15-17：30 全体質疑・応答

閉会挨拶： 第124回森林学会大会運営委員長 澤口勇雄